

国民に全体像説明を

東京電力福島第一原発 事故は、大変クリティカル(危機的)な状況にあると思います。地震と津波によって冷却機能が失われ、原子炉の炉心が高熱になっています。原子炉格納容器内の温度と圧力が上がり、格納容器が破損する可能性がある中で、容器内の空気を抜く

ベント(排出)や海水による冷却でギリギリの状態を保っているといえます。



元東芝・原子力設計技術者 後藤 政志さん

原発危機

緊急発言

私は、事故のはじめの段階で格納容器内の圧力が設計の2倍になっていると聞いて、「これはまずい。スリーマイル(1979年の米原発事故)のようになる」と感じ、格納容器の設計を専門とする者として名前も出してお話をさせていただいています。

正しい情報を

20日には、3号機の格納容器の圧力が上昇し、一時は中の空気を直接抜くベントが検討されました。格納容器というのは、たとえ事故が起きても放射性物質を閉じ込める役割を持っています。それをガス抜きするというのは、今までも大量の放射性物質が排出されることであって、許されないことですが、それをやらないと容器が圧力に耐えられず爆発してしまう恐れがあります。そこまでせざるをえないほど深刻な状況だということです。

さらに厳しい状況があらえないとはいえませんが、原子炉で発生している水素による水素爆発の危険性もありますが、もっと心配なのは水蒸気爆発です。溶けた金属がドロドロの状態のまま水と接すると水蒸気爆発が起

こりえます。原子炉内の正確な状況がわかりませんので、はっきりとはいえませんが、原子炉内の温度、圧力が高く、燃料棒の溶融が激しいため、そうしたことが起こる恐れがないとはいえません。事態を収束させるには、炉心の冷却に尽きま

復につながる外部電源への接続が行われたというのが朗報です。しかし、それで安心とはいえませんが、冷却機能を動かすには、電気、大量の水、水を循環させるポンプとモーターの三つがそろって必要があります。電気の回復は、そのうちのひとつの条件が満たされるということです。

警告はあった

今回の原発事故に関しては、津波の規模が「想定外」だったという言葉が聞かれます。では、その想定の方がどうだったのかということが問われなければなりません。今までの原発の設計では、地震や津波の危険性について専門家の指摘があったにもかかわらず、すべて「そんなことはない」と押し切られてきたのです。そのことは検証されなければなりません。2007年の新潟県中越沖地震では、東京電力柏崎刈羽原発が設計上の2倍、3倍も揺れたのに、その時は「壊れなかったからよかった」などと済ませました。3倍も力が加わったというのは、設計の破綻なので、危険があるなら、その危険に耐えられるように設計するのが、構造の常識です。にもかかわらず、原発では、地震や津波に関してようになってきたことについて疑問を持ってきました。私は、今までの設計の条件が決定的に間違っていたと考えます。